

労働者の立場を完全に棄て去り 資本・当局の代弁者になり下がる



鉄労=志摩と共に、国鉄当局の前にひざまずき、忠誠を誓う動労本部、革マル=松崎。この卑屈な笑いのかけで何万名の仲間が売りとばされていくのか。

奴隷の道、戦争の道 「労使共同宣言・改革労協」弾劾

動労革マル松崎が、「雇用を守る」ためと称し、「動労組合員の利益を守る」と称してやっていることは、かつて「労働者の利益を守るために」と帝国主義の侵略戦争政策に積極的に賛成・協力し、最後には労働者を戦場に駆りたてる役割を果していった産業報国会そのものだ。動労組合員を有無を言わず侵略の道へひきずり込もうとしているのだ。

日帝・国鉄当局の代弁者

松崎や鉄労・志摩らがめざす「鉄道労働」の運動基調の中で、

- 三、新組合は、労働運動の分裂の歴史を二度と繰り返さない決意と理念と組織をもって対処する。労働組合におけるイデオロギーからくる対立・分裂や政党による介入・干渉を許さず、労働組合主義にもとづく運動を進める。
- 四、新組合は、民主主義を守り、自由・平等・公正な社会と世界の恒久平和の実現のため理念を同じくする内外の労働者との連帯を強める。

とうたっている。

ここで言われていることは、階級闘争の否定、労働運動の否定である。松崎は、日帝・国鉄当局への完全なる階級移行を成し遂げ、たとえ「労働組合」の仮面をかぶっていても、すでに労働者を代表するものではなく、一〇〇％日帝・国鉄当局の代弁者となり下ったのだ。「自民党の三塚さんや橋本さんとききあうよう

になって私自身の価値観が変わった。かつてはイデオロギー至上主義で凝り固まっていた。われわれは変節した」という。松崎の場合に示されるように、労働運動内部において「イデオロギー」を対立や分裂の元凶として非難・攻撃し、排除しようとするやり方は、日帝や右翼が用いる常とう手段である。

総評・国労解体の突撃隊

かくして松崎は、中曽根・杉浦の極悪の先兵として国労・動労千葉破壊攻撃に最大限利用されていくのだ。中曽根は、御用組合ではあるが少数組合の鉄労の協力だけでは分割・民営化は不可能、総評内の動労をとり込み攻撃の先兵・突撃隊として利用・動かす、そして松崎は雇用を守るためには「国家の危機、国鉄の危機の中では屈服し、その手先となって危機のりきりのために働くことが労働者の利益である」とベテンをろうしてきた。

組合民主主義さえ否定

いまや、松崎は、中曽根・杉浦の極悪の最先兵として国鉄労働運動解体―産業報国会化を推進し、それも、組合機関をひきまわし、組合員のいっさいの疑問、反抗を圧殺し、組合民主主義の一片さえも解体しつくそうとしているのだ。（続く）